



# メロス通信 不定期便

## 2026.4.4「第32回元気の出る看護介護症例検討会」 ～野田先生の挨拶を紹介します～

あいにく天気が良くないのですが、桜が満開の土曜日に症例検討会参加ご苦労さまです。

新年度の始まりですが、気候危機解決に全くの前進がないこと、それどころか圧倒的にそれに逆行するトランプの戦争ということで世界中の不安も深まっています。

とはいえ、ちょうど今は新入職員のオリエンテーションの時期に重なっています。私も県連会長として、毎年、民医連の医療や介護がどんなものかをごく短く話すという役割が与えられます。

今年は民医連の目指す「いのちの平等」について、他の病院では5割くらいにもなる差額ベッドのないこと、さらに無料低額診療を実施していることだけでなく、健康の社会的決定要因SDHという学説に注目して、病気の大元となる貧困や格差という社会問題にも挑戦していることを話しました。しかし、冒頭述べた不安の中で社会生活をスタートする人にとって、民医連の理念がどれだけ一人一人にとって重い課題を突きつけるのかということを見るとやはりもう一つ、民医連の特徴として職員間の連帯ということをつけ加えないではいられない気になりました。それがつまり「ケアの倫理」ということなのですが、今日はそれについて最近少し考えたことをお話しします。

毎週金曜日、午後9時5分からNHKラジオで作家の高橋源一郎が語る「飛ぶ教室」という番組があるのを知っている人はいますか。

先週の3月27日はキャロル・キングの歌が取り上げられていました。キャロル・キングは1942年生まれ、僕より10歳年上のアメリカの歌手、シンガー・ソング・ライターですが、1971年「君の友だち」という歌を作りました。その年のグラミー賞で最優秀賞をとりました。Youtubeで探してもらえればすぐに見つかりますからぜひ聞いてみてください。あるそう年配ではない事務職員の人が、それを知っているとってメロディをハミングしてくれましたから、今更聴いてみなさいと言うまでもなく皆さんご存知かもしれません。

ラジオ番組ではそれを聞くのではなく、ゲストの伊藤比呂美さんという詩人が自己流に歌詞を翻案して朗読して

ました。(番組冒頭では高橋源一郎さん自身の訳も紹介され、それも心を打つものでしたが)それをここで読んでみます。

落ち込んで  
悩みがあって  
助けが必要で  
何もうまくいかないようなとき  
目を閉じて、わたしのことを考えてごらん  
すぐに、私は、そこに行く  
あなたのいちばん暗い夜だって明るくしてあげる  
あなたはわたしの名前を呼ぶだけでいい  
いい？  
どこにしよう  
わたしはあなたに会いに駆けもどってくるから  
冬も、春も、夏も、秋も、  
あなたは呼ぶだけでいい  
わたしはたちまちやって来る  
そう、そう、そう、  
あなたには友だちがいる



結局、私達の目指すものは1971年のキャロル・キングの歌に帰っていくのだろうかと思います。私達民医連の職員はずっと昔から一人ではなかった、これからもそうだと思います。

今日はこの症例検討会が参加者の皆さんを深いところで揺さぶり、生きていく助けにもなることを祈って、私のご挨拶といたします。



フラットな関係で活発に意見交換する和やかな集会でした。真剣に討議する姿には民医連看護介護への団結を感じました。皆さんのこれからの奮闘に期待します！



### 原発いらん!命が大事!

上関原発を建てさせない山口大集会に参加しました。福島原発事故後、いまだに2万7千人が避難を強いられています。福島の報告をした森松さんもその一人です。郡山市から夫を残し幼い子どもと関西に避難しましたが避難指示ではなかったため補償が切り捨てられ、さらには避難自体を自己責任だと差別や誹謗中傷に苦み



続けています。その思いを次のように訴えられました。  
「私たちは、避難するか、しないか、という選択肢を与えられたのではなく、放射能に被ばくし続けるか、それとも被ばくが嫌なら避難するかという、どちらも選ばたくない二つの苦痛を強制的に選ばされたのです。放射線被ばくから免れ健康を享受する権利は、最も大切な基本的人権です」  
原発は命や人権を脅かすと訴える森松さんに大きな拍手が湧き上がりました。  
原発被害に今なお苦しむ人々の人権回復と上関原発や中間貯蔵施設の建設計画が白紙撤回になるまで県民の中の運動をさらに広げていきます。